

聖書：Iサムエル9：1～27

説教題：雌ろばを捜して

日時：2016年2月28日（夕拝）

8章でイスラエルは王を求めました。その彼らの求めについて主は、偶像礼拝の現れだとしました。他のすべての国民のように王を持ちたいという願いはイスラエルのまことの王、主を退けるものであると。しかし主は民に警告を与えた後、サムエルに「彼らの言うことを聞き入れよ」と言われました。そしてイスラエルの王がどのようにして立てられて行ったかが今日の9章以降で記されます。

まず注目したいのはサウルという人についてです。この人がイスラエルの初代王として召される人です。1節から分かることは、彼は裕福な家に生まれたということです。彼の父キシユの家系をさかのぼって行くと裕福なベニヤミン人アフィアハにたどり着きます。また2節に「美しく若い男」とあります。「イスラエル人の中で彼より美しい者はいなかった。」とまで言われています。しかも背が高い。少し前の時代に結婚する男性の理想の条件として高身長、高学歴、高収入というのがありましたが、サウルはこの内、二つは満点です。それに加えていわゆるイケメン。彼は人々から羨ましがられるような人物でした。

しかしだから彼は王に選ばれたのだとか、主に選ばれる人はこういう人だと言うのは行き過ぎでしょう。そのことは彼がこの後、どんな王になるかを考えれば分かります。また彼に次ぐ第2代目の王、ダビデを選ぶ際に、主が言われた次の言葉も思い浮かんで来ます。Iサムエル記16章7節：「しかし主はサムエルに仰せられた。『彼の容貌や、背の高さを見てはならない。わたしは彼を退けている。人を見るようには見ないからだ。人はうわべを見るが、主は心を見る。』」そこである説教者は、サウルはこの世が選ぶような人だと言います。イスラエルは他のすべての国々にならいたいと願ったが、サウルはまさにこの世の規準で人々が敬うような人であったと。肉体的な、外側の姿を高く評価するのはこの世の常であると。そこまでの時点で否定的に言う必要もないように思いますが、私たちは正しいバランスが必要です。大切なのはやはり中身です。「人はうわべを見るが、主は心を見る」がやはり聖書が言う第一の原則でしょう。

そのサウルについて分かることは、彼はここで父の雌ろばがいなくなって、それ

を捜しに出かけていることです。彼は従順な息子のようです。一方であまりリーダーシップを持っているとは言えないようにも読めます。彼は若い者を連れて旅に出ますが、行く先で若い者の言葉に従っています。好意的に見れば下位の者にも聞く耳を持つ謙遜な人とも言えます。また7節では神の人に会いに行く際、「何を持って行こうか。その人に持って行く贈り物がないが。」と心を配っている辺りは礼儀正しい人とも言えます。しかし9章全体で強調されていることは、彼は全く王になる野望を持っている人ではなかったということでしょう。おそらく8章の出来事を経て、イスラエルの中には、我こそイスラエルの王にならんと志す者たちが少なからずいたのではないのでしょうか。サムエルのもとにやって来て自分の能力をアピールする人たちもいたのではないのでしょうか。しかしサウルはそんなことは毛頭考えていなかった人だった。20節でサムエルに食事に招かれて、「イスラエルのすべてが望んでいるものは、だれのものでしょう。それはあなたのもの、あなたの父の全家のものではありませんか。」と言われた時、彼は21節でこう答えています。「サウルは答えて言った。『私はイスラエルの部族のうちの最も小さいベニヤミン人ではありませんか。私の家族は、ベニヤミンの部族のどの家族よりも、つまらないものではありませんか。どうしてあなたはこのようなことを私に言われるのですか。』」神の召しはしばしばこのようなものです。我こそは！と思う人ではなく、たいてい尻込みする人、本人としては全く望んでいない人、そういう人の思いとは異なる人を神は召されるのです。神はこのようにご自身の方法でご自身の器を用意し、用いて行かれます。

2つ目に見たいことは、サウルがサムエルに出会うまでの導きについてです。本来、彼の出身や背景が記された後、すぐサムエルとの出会いが記されても良いように思いますが、一見不要とも思える紆余曲折が記されています。そのスタートはサウルがいなくなった父の雌ろばを捜しに出発したことです。4節を見ると、その旅はなかなかうまく行かなかったようです。「見つからなかった」という言葉が連発しています。4節：「そこで、彼らはエフライムの山地をめぐり、シャリシャの地を巡り歩いたが、見つからなかった。さらに彼らはシャアリムの地を巡り歩いたが、いなかった。ベニヤミン人の地を巡り歩いたが、見つからなかった。」この旅は結局失敗だったのか。そこでサウルは「もう帰ろう。父が心配するといけないから。」と言います。ここで連れの若者が「そうしましょう」と言ったら、それまででした。しかししもべは「待ってください。」と言います。「この町には神の人がいます。その人の所に行って、どうしたら良いか聞きましょう！」と言います。しかしサウル

は、食べ物もなくなったし、贈り物も持ち合わせていないし、どうしようかと言うと、若い者は4分の1シケルの銀を持っていると言います。それなら大丈夫だ、さあ行こうと言って出発します。

そして町に入ってまず出会った水汲みの娘たちにサウルたちは尋ねます。「ここに予見者がおられますか。」すると娘たちは、その人はすぐ先のところにいると言います。「今上って行けば、その方に会えるはずです」と。そうして進んで行くと、14節でグッドタイミングでサムエルと出会います。なぜサムエル記の著者はこのような成り行きを長々と書き記したのでしょうか。それはこれら一つ一つの出来事の背後に、主の隠れた摂理があったことを示すためでしょう。この9章のメッセージのカギを握るのは15~17節です。この部分はなくても今日の章の話は通じます。14節の後、話は18節に続きます。しかしあえて話の流れが中断されて、そこに主の言葉が割り込む形で書き入れられています。これによって私たちは今日の記事をどのように読むべきかを教えられるのです。

注目すべきは16節で主が「あすの今ごろ、わたしはひとりの人をベニヤミンの地からあなたのところに遣わす。」と言っていることです。サウルは色んなプロセスを経てサムエルの町までやって来たのですが、これは主が彼を「遣わした」という出来事だったのです。もちろんサウルにそんな意識はありません。彼はただ父に頼まれて雌ろばを追いかけて来ただけです。そして見つからないから帰ろうとしたところ、しもべが「神の人に会いましょう」と言うので、そうしただけです。またお金がなくて、あきらめなければならないかと思いましたが、若い者がたまたま銀を持っていたので、それが可能になっただけです。そしてサムエルの家はどこかと18節でとりあえずある人に質問してみたら、何とその人がサムエルだったというだけです。

ここから教えられることは、私たちの日常的な出来事には私たちの知らない主の計画や導きがあるということです。今、「日常的な出来事」と申し上げたことは大切な点だと思います。主の導きというと、私たちは何か特別なこと、独特な出来事だけを考えやすい。モーセが燃える柴の中から語られる主と出会ったり、パウロがダマスコ途上で栄光の主に出会ったり、そういう奇跡的なこと、衝撃的なこととセットで主の導きを考えやすい。しかし今日の章にあるのはごくごく普通のこと、わざわざ聖書に書く必要があるだろうかと思うほどのことです。雌ろばがいなくなっ

たら、私たちとしては厄介なことになったと思うだけでしょ。そして捜せど捜せど見つからないなら、私たちはため息をつくでしょ。そして主はここにおられないとか、主の導きはないと言いやすいでしょ。しかし事實は、主はこのただ中に介在しておられて、ご自身の目的に従って導いておられたのです。ですから私たちは日常のどんな小さなことも、これはつまらないことだと言ってはならないのです。そういった出来事にも主の隠れた御心と御手とがあるのです。

そして三つ目に見たいことは、主はこの摂理の御手をどんなお心によって發揮しておられるのかということです。主は 16 節で「サウルを遣わす」と前もって語っておられましたが、その動機についても語っておられます。それはサウルをイスラエルの王として立てて、ペリシテ人の手から救うということです。民の叫びがご自身に届き、その民の姿を見たからであるということです。ある人はこれを見て、このサムエル記はイスラエルに王が立てられることをどのように捉えているのか、と問います。前の 8 章では、王を求めるイスラエルの態度は明らかに批判されていました。ところがこの 9 章では神ご自身がイスラエルのために王を立てようとしています。今後も同じようになるところでは否定的な見方で語られ、また他のところでは肯定的な見方で語られます。そのためある学者たちは、サムエル記の元になった資料には二つあって、それらは王制に賛成の立場と反対の立場とであったと言います。それを編集した人があちこち切り貼りしたために、あっちでは賛成し、こっちでは反対するという結果となり、統一感が失われている。このような見方をすれば、聖書は単なる寄せ集めの資料集となり、一貫した主張を持たない書としてその権威が軽んじられることにもつながるでしょう。

しかしもう一つの見方が可能です。根本的に主なる神は、イスラエルに王を与えて彼らを祝福しようと計画されていました。そのことは前回も触れた通り、この書よりも前の申命記において、さらには聖書の最初の創世記において語られていました。ところが前回の 8 章で、王を求めるイスラエルの動機は正しくありませんでした。主はそれを見て、「彼らに王を立てるのはやめた。こんな状態ではどうして彼らを祝福できよう。王制の確立は無期限に延期だ！」としても良かった。しかし主は今日の 9 章でイスラエルのために王を立てようとして積極的に動いておられます。なぜでしょうか。それは 16 節後半にあるように、「民の叫びがわたしに届いたので、わたしは自分の民を見たからだ。」ということです。一言で言って主のあわれみによるのです。主の摂理はこのようにあわれみとセットのもの、あわれみに突

き動かされてのものなのです

私たちはここに主があわれみの心で彼らのために王を立て、彼らを祝福することに熱心であるお姿を見ます。これはやがて私たちのためにまことの王を立てて、私たちに祝福してくださる神の熱心とつながっています。神は今日の章に示されているのと同じあわれみの心によって、私たちのためにイエス・キリストを立て、祝福して下さいます。私たちはこの神のお心と摂理を感謝して、神が立ててくださったまことの王に信頼し、この方を通して神がくださる祝福に生かされたいと思います。

また私たちは、このあわれみの心を持つ神が私たち一人一人の生活にも、同じく奇しい摂理の御手をもって導いて下さっていることを告白すべきではないでしょうか。神の摂理は王を立てることにだけ発揮されて、一人一人の生活には発揮されないということはありません。私たちをあわれんで奇しい摂理により、王を立てられた神は、同じく奇しい摂理の御手をもって、私たち一人一人の生活の小さな出来事に至るまで導いて下さいます。私たちの今の生活も、雌ろばを捜しに出かけてさっぱり見つからないサウルのようなかもしれません。良い導きを感じられない日々の連続の中にあるかもしれません。しかし私たちには分からなくても、そこにも主のあわれみによる隠れた御心と御手とがある。これを信じることは、私たちに何という慰めをもたらしてくれるのでしょうか。カルヴァンはこの摂理についてキリスト教綱要の中でこう言っています。「このことを知っておれば、それに必然的に伴うのは、栄える成功の場合は心からの感謝であり、あるいは逆境の場合には忍耐であり、あるいは将来に関しては信じられないほどの安心である。」 主の摂理を見上げないと、私たちは成功した時には有頂天になって高ぶり、逆境の場合には落胆して絶望し、将来については毎日不安と恐れで一杯になってしまいます。しかし主が憐れみによる摂理の御手をもってすべてを導いて下さっていると信じるなら大きく違ってきます。私たちは心からの感謝と忍耐と信じられないほどの安心に生きることができる。主はこれまでもそのような御手をもって私たちを導いて下さいましたし、これからもそうです。私たちはその主を告白して歩みたいのです。すべてのことの背後に私たちの知らない良い御心を持ち、奇しい御手をもってそれを実現される主。この主を見上げるところから感謝と信頼と希望をもって主に従う歩みを導かれて行きたいと思います。